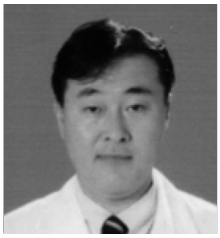

―巻 頭 言―

英語力とプレゼンテーション力

学術委員会担当理事　小野口　昌　久
（金沢大学医薬保健研究域保健学系量子診療技術学分野）

この度，渡邊理事長より理事を拝命致しました。浅学非才ですが，新理事長の下，核医学技術の発展に向けて微力ながら貢献する所存でおりますので，皆様のご指導，ご鞭撻の程，宜しくお願い申し上げます。

さて，大学，研究機関等の勉強会の1つに「抄読会」というものがある。私の研究室でも学部生や大学院生を対象に，定期的に「抄読会」を行っている。ちなみに「抄読」という語彙は「広辞苑」には載っていない。そこで文字から意味を推測すると，「抄」という字に「古典などの難解な語句を抜き出して注釈すること」という意味があることから，おそらく「抄読」とは「難解な語句を抜き出して注釈しながら読む」ことになるのであろう。では，実際の「抄読会」はどのように行っているのだろうか。一般的には，各担当者が論文を紹介し，他の参加者はそれに基づいて議論する。担当者の多くは論文の要旨，図表や画像を抜粋し，全員にプリント配布するか，パワーポイント等で説明するのだが，中にはその英文を一字一句日本語に翻訳（今ではコツコツと辞書を引かず，トランスレータソフトによる一括変換が多い？）し，最初から最後まで読み上げる者がいる。直訳調の言葉が続き，詰まるところ何を言っているのかが分からない，という場面も多い。私は学生には，翻訳の意義は，単に上手に訳すことが大切ではなく，論文の構成，記述法，評価法，考察記述，図表を通し，研究や論文作成を進める上での基礎を習得するためのトレーニングと説明している。このような観点から考えると，「抄読会」は「日本語翻訳」の段階を省略し，「英語読解→内容の理解・把握→日本語で議論」になるよう英語力を身につけていってもらいたいと思う。

次にプレゼンテーション力であるが，某新聞によると，米国ではカンファレンスの最初に “bottom line question” という質問がされるという。たとえば，学生，卒後1年目，卒後2年目，卒後3年目および指導教員でカンファレンスをしているとする。そのカンファレンスの最初に指導教員が厳しい顔で突然学生に向かって，「心臓には部屋が一体いくつある？」と聞き出す。指導教員だからよほど難しい質問をするだろうと思っていた学生は，あまりにも基本的すぎる質問に耳を疑い驚く。もしかして心臓にある部屋の数は5つとかいう答えなのではないかとさえ考えめぐらしてしまう。しかし，しばらくの沈黙の後に，学生は勇気を持って答える。「4つです…」。すると，指導教員はおもむろに「そうだ」と笑って答える。とその瞬間，緊張した面持ちの出席者一同は一斉に胸をなで下ろして安堵するのである。この “bottom line question” は，半分冗談で半分真剣である。要は，議論をする前に「すべての出席者が参加することが前提」を再確認しようとしているのである。一般的に大学の講義やカンファレンスなどは，話し手が聞き手の理解や反応を逐次確認せずに一方的に話しまくることが多い。聞き手のレベルや反応を理解せずに一方的に話すと，コミュニケーションが成り立たないばかりか，単に知識をひけらかす自己満足にしか映らないことにもなりかねない。私自身，人を引きつけるようなプレゼンテーション能力は持ち合わせていないが，話し手と聞き手の行き違いを是正するように常に努めながら話や議論を進めていきたいと思う。